

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

語註・典故・作詩メモ		結句	転句	承句	起句	詩題
早梅・・・早咲きの梅 占尽・・・占拠する 故園・・・古い庭 疑是・・・まるでのようだ 春露・・・春かすみ(もや) 馥郁・・・よい香りがただようさま 別乾坤・・普通とは違つた世界、別世界、別天地	風情・・・おもむき、味わい 枝頭・・・枝の先端	寒 ○	疑 ○	占 ●	早 ●	臨春閣看梅 (元韻)
		香 ○	是 ●	盡 ●	梅 ○	
		馥 ●	枝 ○	風 ○	一 ●	
		郁 ●	頭 ○	情 ○	樹 ●	
		別 ●	春 ○	向 ●	倚 ●	
		乾 ○	霽 ●	故 ●	南 ○	
		坤 ◎	生 ●	園 ◎	軒 ◎	

その他のメモ
「臨春閣」 三溪園を代表する建築物で、重要文化財。 一六四九(慶安二)年建築、一九一五年移築。 桃山時代に豊臣秀吉が建てた聚楽第の遺構と伝えられて いましたが、現在では和歌山県岩出市にあった紀州徳川 家の別荘・巖出御殿(いわでごてん)ではないかと考え られています。

読み下し文	
寒香馥郁 別乾坤	疑うらくは是れ 枝頭春霽を生ずるを
	風情を占尽して 故園に向かう
早梅一樹 南軒に倚る	臨春閣看梅

作詩日	平仄式	名前
平成二九年三月六日	平起式	牛山 知彦

語註・典故・作詩メモ			
虚窗 わびしい窓			

結句	転句	承句	起句	詩題
隔 ●	歸 ○	僑 ○	斜 ●	客懐
壁 ●	心 ○	舎 ○	月 ●	
弦 ○	茫 ●	十 ●	虚 ○	
歌 ○	茫 ●	載 ●	窗 ○	
涙 ○	一 ●	獨 ●	杯 ●	(寒韻)
暗 ●	燈 ○	長 ○	酒 ●	
弾 ◎	下 ●	歎 ◎	寒 ◎	

その他のメモ			

読 み 下 し 文				
壁 <small>かべ</small> を隔 <small>へだ</small> つ 弦 <small>げんか</small> 歌 涙 <small>なみだ</small> 暗 <small>あん</small> に弾 <small>だん</small> ず	帰 <small>きん</small> 心 茫 <small>ぼう</small> 茫 <small>ぼう</small> 一 <small>いち</small> 灯 <small>とう</small> の 下 <small>もと</small>	僑居 <small>きゆうきょ</small> 十載 <small>じゅうざい</small> 独 <small>ひと</small> り長 <small>ちやう</small> 歎 <small>たん</small> す	斜月 <small>しゃげつ</small> 虚窓 <small>きょそう</small> 杯酒 <small>はいしゆ</small> 寒 <small>さむ</small> し	客懐 <small>きやくかい</small>

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

作詩日	平仄式	仄起式	名前
岡嶋 宣昭			

語註・典故・作詩メモ	結句	転句	承句	起句	詩題
凛冽：寒気の厳しいさま 早晨：早朝 辿：ゆつくり歩く（たどるは国字） 巔：山の頂き鈍色：にび色：濃い鼠色 寂寞：ひっそりとして寂しいさま 寒郊：寂しい村外れ 静淵：静かに奥深い	独 ●	雪 ●	冬 ○	凛 ●	北地寒景
	佇 ●	原 ○	雲 ○	冽 ●	
	寒 ○	寂 ●	鈍 ●	早 ●	
	郊 ○	寞 ●	色 ●	晨 ○	
	愉 ○	吞 ○	隠 ●	村 ○	先韻
	静 ●	煩 ○	山 ○	路 ●	
	淵 ◎	悶 ●	巔 ◎	辿 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

作詩日	仄起式		名前
	H	29・3・9	
			武田 一郎
読 み 下 し 文			
北地寒景 きたち かんけい		凛冽早晨、 りんれつ そうしん 村の路を辿ず むら みちを せんず	
冬雲鈍色山巔を隠す とううんどんしよきんでん かく		雪原は寂寞と煩悶を呑み せつげん せきぼく はんもん の	
独り寒郊に佇み静淵を愉しむ ひと かんこう たたず せいえん たの			
その他のメモ 冬の寒さ厳しい北海道富良野を訪れた時、鈍色の冬雲が日高山脈の峰々を覆い隠し、雪原はひっそりと音もなく、北の大地に独り佇み、その静けさを愉しんだ			

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
開放…花が開く「南枝開放北枝寒」(吳偉業・臨清大雪) 暗香…どこからともなく漂ってくるようにおい。 紛葩…花が乱れ散ること 病蓐…病の床				春 ○	病 ●	梅 ○	櫻 ○	病間偶成
				愁 ○	蓐 ●	片 ●	花 ○	
				萬 ●	一 ●	紛 ○	開 ○	
				感 ●	窓 ○	葩 ○	放 ●	
				未 ●	知 ○	果 ●	暗 ●	
				心 ○	変 ●	實 ●	香 ○	
				同 ◎	節 ●	充 ◎	通 ◎	(東韻)

その他のメモ			

読 み 下 し 文			
春愁万感にして 未だ心同じからず	病蓐の一窓 変節を知らせども	梅片紛葩すれば 果実充ちむとす	桜花開放すれば 暗香通らむとし

作詩日	平仄式	名前
平成二十九年二月二十二日	平起式	
南上清一郎		

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

語註・典故・作詩メモ	結句	転句	承句	起句	詩題
三浦半島の最先端の三浦台地から相模湾に面して西に広がる「小網代の森」は、山、谷、川、湿地、草原、干潟、そして海と、1・五キロ程の流域すべての生態系が保全されることによりアカテガニやゲンジボタルなど二千種を超える生命が生息している。将に「環境保全と環境学習の場が共存する都市型のエコツーリズムの恰好の場が「浦の川」に沿って復元・公開されている。 ※「酒仙」II 小網代湾の畔で小さい酒屋を営む酒豪老主人	興 ●	邑 ●	深 ○	希 ○	小網代浦川下 (先韻)
	曰 ●	人 ○	山 ○	有 ●	
	吾 ○	問 ●	流 ○	原 ○	
	将 ○	我 ●	域 ●	生 ○	
	見 ●	向 ●	下 ●	悉 ●	
	酒 ●	何 ○	湾 ○	保 ●	
	仙 ◎	処 ●	淵 ◎	全 ◎	

作詩日 平成二十九年三月八日

名前 原田睦夫

文 し 下 み 読				
興 <small>きよう</small> じて曰 <small>いわ</small> く 吾 <small>われ</small> 将 <small>まさ</small> に酒仙 <small>しゆせん</small> に見 <small>ま</small> えんと	邑 <small>さと</small> 人 <small>びと</small> 我 <small>われ</small> に問 <small>と</small> う 何処 <small>いずこ</small> に向 <small>む</small> かうのか	深山 <small>しんざん</small> の流域 <small>りゆういき</small> を湾淵 <small>わんえん</small> へ下 <small>くだ</small> る	稀有 <small>けう</small> なり原生 <small>げんせい</small> 悉 <small>ことごと</small> くの保全 <small>ほぜん</small> とは	小網代 <small>こあじろ</small> の浦 <small>うら</small> の川 <small>かわ</small> を下 <small>くだ</small> る

その他のメモ

五春遊涉

五春遊涉

五春遊涉

五春遊涉

野	幽	烈	五
梅	徑	烈	春
馥	倚	樵	邑
郁	邱	聲	里
促	詩	山	晃
鶯	想	内	清
鳴	動	轆	明
野梅馥郁	幽徑に邱を倚す	烈烈たる樵声山内轆	五春の邑里晃清明
促鶯鳴	動	轆	明
野梅馥郁と促鶯鳴	幽徑に邱を倚すは詩想動	烈烈たる樵声山内轆	五春の邑里晃清明

日光・太陽の光
 樵声・樵の斧の音
 幽徑・人けのなほ静かな小道

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

語註・典故・作詩メモ

.....

・テレビのドラマを観て

・漆身吞炭||春秋時代の晋の子豫の仇討ちの譬え

・貞臣||忠正の臣

・殉忠魄||忠義のために身命を捨てた霊

結句	転句	承句	起句	詩題
至 ●	不 ●	一 ●	漆 ●	
誠 ○	消 ●	夜 ●	身 ○	
思 ○	貞 ○	除 ○	吞 ○	
念 ●	臣 ○	仇 ○	炭 ●	
淡 ●	殉 ○	排 ●	苦 ●	
神 ○	忠 ●	積 ●	辛 ○	
州 ◎	魄 ●	憂 ◎	稠 ◎	

作詩日 平成二十九年二月

平起式

名前 松本祐輔

その他のメモ

読み下し文			
至誠の思念 神州に淡し	消えず貞臣 殉忠の魄	一夜仇を除き 積憂を排す	漆身吞炭 苦辛稠し

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
韻鏡：音韻学の書物の名 詩題は袁枚の詩から借題しました。 春の景色を詠もうと思ったが中々出来ない。 開き直って出来を気にせず頑張ろう。	詩 ●	新 ○	一 ●	韻 ●	春日雜詩	(庚韻)		
	作 ●	鶯 ○	朝 ○	鏡 ●				
	心 ○	梅 ○	一 ●	十 ●				
	閑 ○	信 ●	夕 ●	年 ○				
	不 ●	東 ○	句 ●	耆 ○				
	問 ●	風 ○	難 ○	碩 ●				
	程 ◎	度 ●	成 ◎	聲 ◎				

その他のメモ

読み下し文				作詩日	仄起式
詩 ^シ 作 ^{サク} 心 ^{ココロ} 閑 ^{シズカ} に程 ^{ホド} は問 ^ト わず	新 ^{シン} 鶯 ^{オウ} 梅 ^{バイ} 信 ^{シン} の東 ^{トウ} 風 ^{フウ} 度 ^{ワタル}	一朝 ^{イツチョウ} 一夕 ^{イツセキ} 句 ^ク 成 ^ナ り難 ^{ガタ} し	韻 ^{イン} 鏡 ^{キョウ} 十 ^{ジュウ} 年 ^{ネン} 耆 ^キ 碩 ^{セキ} の聲 ^{コエ}	三月四日	名前
			春日雜詩 ^{シンジツツザツシ}		三並 哲治

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
清香 靖康・・・芳香 蓮峯・・・富士山 酒句・・・酒句川 昆・・・なかまむれ				春 ○	白 ●	眼 ●	梅 ○	春
				探 ○	雪 ●	下 ●	花 ○	
				野 ●	蓮 ○	酒 ●	爛 ○	
				出 ●	峯 ○	白 ○	漫 ●	
				蝶 ●	朝 ○	水 ●	満 ●	
				昆 ○	日 ●	面 ●	清 ○	
				翔 ◎	映 ●	光 ◎	香 ◎	(陽韻)

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

読み下し文				作詩日
春 ^{はる} を ^{さが} 探 ^さ して野 ^の に出 ^で れば	蓮 ^{れんほう} 峯 ^{ほう} の白 ^{はく} 雪 ^{せつ}	眼 ^{がん} 下 ^か の酒 ^{さか} 白 ^わ	梅 ^{ばい} 花 ^か 爛 ^{らん} 漫 ^{まん}	平成二十九年二月十四日
蝶 ^{ちよ} 昆 ^{さん} 翔 ^{しょう}	朝 ^{あさ} 日 ^ひ に映 ^は える	水 ^{みな} 面 ^も 光 ^{ひか} る	清 ^{せい} 香 ^{こう} に満 ^み つ	

その他のメモ

作詩日 平成二十九年二月十四日

名前

森谷正彦

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
				芳 ○	醉 ●	清 ○	東 ○	
				香 ○	墨 ●	韻 ●	風 ○	
				馥 ●	描 ○	雅 ●	既 ●	
				郁 ●	梅 ○	懷 ○	動 ●	
				草 ●	興 ○	一 ●	孟 ●	
				堂 ○	何 ●	朶 ●	春 ○	
				邊 ◎	盡 ●	妍 ◎	天 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

作詩日 平成二十九年二月

平起式

名前

諸星暢義

その他のメモ

--

読み下し文			
芳香馥郁として草堂の辺り <small>ほうこうふくいく とうどうのあた</small>	醉墨 描梅 興何ぞ尽きん <small>すいぼく びようばい きようなん 何ぞつじん</small>	清韻雅懷 一朶妍なり <small>せいゐんがかい いちだけんなり</small>	東風既に動く孟春の天 <small>とうふうすで うごく もうしゅんのてん</small>

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

語註・典故・作詩メモ		結句	転句	承句	起句	詩題
<p>二年前の正月清洲城へ行つた。雪の中、堀にかかる橋の赤い欄干が目立った。織田、豊臣二氏ゆかりの地。戦国時代このあたりでは幾多の波乱があつた。</p> <p>承句 最初、堀を渡つたので「渡赤欄」↓欄干は渡らない 結句 最初、天守閣の窓からのぞきながらのつもりで「窓前懐古」としたが、その前に入城の記載がない。</p>	雄 ○	武 ●	白 ●	尾 ●	清洲城	
	圖 ○	烈 ●	亞 ●	州 ○		
	懐 ○	織 ●	城 ○	郊 ○		
	古 ●	豊 ○	頭 ○	外 ●	(寒韻)	
	足 ●	稱 ○	見 ●	雪 ○		
	波 ○	覇 ●	赤 ●	飛 ○		
	瀾 ◎	處 ●	欄 ◎	寒 ◎		

その他のメモ

城というところ「荒城の月」や三橋美智也の歌のように「昔の栄華に比べ今は…」で結びたくなる。それではつまらない。雄図を称えようと思つたが、うまく結べなかつた。

読み下し文			
雄図 <small>ゆうと</small> を懐古 <small>かいこ</small> すれば波瀾 <small>はらん</small> 足 <small>た</small> る	武烈 <small>ぶれつ</small> の織豊 <small>しよくほう</small> 覇 <small>は</small> を称 <small>と</small> えし処 <small>ところ</small>	白亜 <small>はくあ</small> の城頭 <small>じやうとう</small> 赤欄 <small>せきらん</small> 見 <small>み</small> ゆ	尾州 <small>びしゅう</small> 郊外 <small>かうがい</small> 雪飛 <small>ゆきと</small> びて寒 <small>さむ</small> し
清洲城 <small>きよすじやう</small>			

作詩日	平仄式	名前
平成29年3月8日	平起式	山口 幸雄